【カリフォルニアの朝青龍】

角田亘（国際医療福祉大学医学部　リハビリテーション医学教室　主任教授）

＊2017 年に某誌に発表したものを、一部改訂した。

カリフォルニア州にあるスタンフォード大学への留学を終え私が 2006 年に帰国してから、すでに 10 年以上が経過した。先日、留学中に知り合った日本人の友人たちと「どんな時に留学時代を思い出すか？」という話題になった。一人は、サンフランシスコ（サンフランシスコとスタンフォードとの間の距離は、車で 40 分程度）のゴールデンゲートブリッジの写真を見る時にと答え、別の一人は、米国のゴルフ中継で眩いグリーンを目にする時にと答えた。一方で、私の答えは彼らのものとは全く異なる。私は、かの有名な相撲取りである朝青龍を見ると、瞬時にしてあの頃を思い出す。モンゴル出身の第 68 代横綱、朝青龍明徳の姿を目にすると、あのカリフォルニアでの日々が懐かしく思い出されるのである。

2004 年の 10 月、悲願であった米国留学の夢がようやくかない、私はサンフランシスコ国際空港に降り立った。そして、その数日後からスタンフォード大学脳卒中センターでの生活が始まった。ただし、鍛えていったはずの英会話も当初は全く歯が立たず、救急室で患者を目の前にしてもほとんど言葉を発せなく居場所に困る日々が続いた。自宅に帰っても、テレビの英語番組を十分に理解できるわけでもなく、大きな焦りとささやかな絶望が私を包んだ。そんな当地において唯一、ケーブルテレビの「テレビジャパン」というチャンネルだけが日本の番組を流していた。ほとんどが数時間前もしくは数日前に日本で放送された番組の録画放送であったが、その中で二つだけリアルタイムで（日本国内での放送に遅れることなく）放送される番組があった。ひとつは定時の NHK ニュースであり、もうひとつは NHK の大相撲中継であった。渡米前の私は大相撲など見たこともなかったが、当地では「日本語恋しき」との思いからテレビジャパンでの大相撲中継を欠かさず見るようになった。その中継において、いつも画面の中で躍動し主役の座を譲らなかったのが朝青龍である。

日本とカリフォルニアの時差は 17 時間（サマータイム施行時は 16 時間。日本が進んで、カリフォルニアが遅れている）であるため、結びの一番で朝青龍が登場する 17 時 50 分頃は、カリフォルニアでは日付が日本に追いついたばかりの 0 時 50 分となる。私は、本場所開催中は夜中の 0 時 30 分頃になると必ずテレビの前に座り、テレビジャパンにチャンネルを合わせた。カリフォルニアの深夜の静寂の中で登場してくる朝青龍は、いつだってふてぶてしく、仏頂面のまま相手の力士を豪快にぶっ倒すのが常であった。取組後の彼は、万雷の拍手を浴びせる日本人観客の中を、これでもかといわんばかりに偉そうに堂々と引き上げる。モンゴルから単身で相撲の本場である日本に渡り、いまやふんどし（まわし）一丁の姿で日本の老若男女を虜にする。そんな彼の姿に、私はなんと尊敬の念と憧れを抱いた。かつて経験したことのない苦労を異国で味わっている私の目には、異国で輝きを放ち続ける彼が強烈なるヒーローとして映った。彼の取り組みが終わる頃のカリフォルニアは深夜の 1 時となっていたが、眠気が強くなければ私はひとりアパートの外に出て、カリフォルニアの星空を見つめた。そして、朝青龍の仏頂面を思い出しながら、私は自らを鼓舞した。医学と相撲と舞台は違えど、彼のように異国で負けずに戦い抜こうとの決意を自ら確認したのだ。ところが、翌朝になり脳卒中センターに出勤すると、朝青龍にいただいた気合いが効を奏することはなく、やはり事は順調には進まない。そして、深夜になって再びテレビの前に座る時には、なんとも言えない悔しさを私は噛みしめていた。

千秋楽の最後に行われる朝青龍の優勝インタビューは、当地では日曜の午前 0 時 40 分頃に始まる。朝青龍は流暢な日本語で無頼かつ痛快な台詞を吐き、場内を沸かしたまま土俵を去る。そんな彼を見ながら私は「次の場所が始まるまでには絶対に・・・」などと誓いを立てた。しかしながら、およそ 2 か月が経過して次の場所が始まっても、たいていの場合私は自らの目標には至っておらず、自分自身を反省するとともに、このモンゴルからやってきた若者に嫉妬の念を抱いた。

結局私は、二年間の留学生活で Pubmed に載る英語論文を 3 本書き上げ、数点のインパクトファクターを獲得した。また、渡米当初は無給であったが、およそ半年間を経過した時点からスタンフォード大学から給料をいただけるようになった。日本への帰国直前には、非常に多少ではあったがスペイン語で当地のヒスパニック患者も診察できるようになった。けれども私は、この留学は医学者としては「負けに近い引き分け」であったと思っている。なぜならば、留学期間の最後まで「米国（世界）に追いつきたい」との思いが私を支配していたからだ。

米国滞在中の私には「彼ら（現地の研究者たち）からアドバンテージを奪った」と感じる瞬間が全くなかった。留学中の私は終始「追う立場」に甘んじており、心のどこかにいつも劣等感を感じていた。私が米国滞在中に行われた 12 場所中で 10 回の優勝を飾った朝青龍と比べると、私の米国留学は成功（勝ち）とはほど遠かった。ただし、である。人生経験（一度きりの人生）という観点から見ると、このカリフォルニアでの 2 年間は、私にとってこのうえなく貴重なものであった。ひとりの人間としても医学者の一人としても、私の視野は米国留学中に確実に大きく広がった。この留学によって、私の人間性が多少なりとも研ぎ澄まされたことも間違いない。そして、洋の東西を問わず多くの友人の知己を得ることができた。カリフォルニアでの日々は、私にとっては、間違いなく priceless なそれである。

私の座右の銘として「志あるもの、海を渡る」というものがある。この言葉は、おそらくはスポーツ雑誌である「Number」が渡米してロサンゼルス・ドジャースに入団した野茂英雄をたたえた記事の中で見つけたように思う。私はこの言葉を心の拠り所として留学の機会を待ち続け、ついには自らの手でそのチャンスを手に入れた。そして、万事順調ではなかったが、カリフォルニアでの日々は私の人生において最大の財産となった。医療医学の道を進まんとする若き挑戦者たちに対して、あえてひとつだけ言葉を送ることができるのであれば、私は彼らにこの言葉を送りたい。そして願わくば、朝青龍や野茂英雄のように、海の向こうで成功を遂げていただきたいと思う。

それにしても、米国から帰国後の 10 年間はまさに「変遷の時」であった。留学当時の米国ではジョージ・ブッシュが大統領の座にあったが、その後にバラク・オバマが黒人初の大統領となり、次いで今ではあの不動産王ドナルド・トランプが最高権力を握っている（＊2017 年現在）。朝青龍明徳は、泥酔したうえでの暴行事件で角界を去り、いまや実業家兼慈善家兼タレントのドルゴルスレン・ダグワドルジとなってしまった。一方で私は、あの当時には影も形もなかった新設医学部で今年（＊2017 年）から教員の地位を得ている。そして来年度からは、アジア各国からこの新設医学部に集まった留学生に対して講義を行うのだが、その中には朝青龍の故郷であるモンゴルからやってきた留学生も含まれている。まさに「We did change!」である。

（終わり）